

令和8年度 時悠館 ロビー展

ひろしまのもみじ

－伊藤之敏力エデ細密画展－

植物研究家・樹医

いとうゆきとし

伊藤之敏

県内の自然公園の保護に尽力してきた元広島県職員。元庄原市文化財保護審議会会長。現在も樹医で活躍中。安芸高田市文化財保護審議会委員。

伊藤之敏さんが広島県内を30年かけて巡り歩き描いた、原画21枚を展示します。



上帝釈峡エリアで新たに発見



タイシャクイタヤ

Acer mono Maxim. var. *taishakuense* Ogata
(細密画:伊藤之敏)

○会期：令和8年9月1日（火）～令和9年1月31日（日）

○会場：庄原市帝釈峡博物展示施設 時悠館 ロビー

（庄原市東城町帝釈未渡1909番地）

○主催：時悠館、時悠館友の会

○関連行事：会期中の11月7日（土）13:30～15:00に、伊藤之敏さんの市民講座を予定。

（別途、市HP、ポスター・チラシ等で公開します）

○連絡先：時悠館 庄原市東城町帝釈未渡1909番地 TEL 08477-6-0161 FAX 08477-6-0162

E-mail jyuu-tou@city.shobara.lg.jp



広報しょうばらに、伊藤之敏さんが描いたタイシャクイタヤについて解説した記事があります。この度のロビー展の開催にあわせて、一部編集してご紹介します。

タイシャクイタヤから学ぶ 地球の歴史

今回は、国内では帝釈峡周辺に限って分布し、カエデ属の一種である「タイシャクイタヤ」を紹介します。

帝釈峡といえば紅葉が連想されますが、これは大正時代以来、イロハカエデの植栽に尽力した先人の功績によるところが大きいと思われます。本市の植物に詳しい元庄原市文化財保護審議会会長の伊藤之敏さんによれば、日本にはカエデの仲間は26種あるとされ、広島県には22種が知られています。それぞれの種はいずれも、私たち人類の出現よりも前から、地球上で生きてきた歴史をもっています。

タイシャクイタヤは、カエデの中でも特に数奇な歴史をもつ種だそうです。昨年11月、当館で開催された「自然を見つめよう会」の研修行事では、本種が、帝釈峡周辺と朝鮮半島南部の石灰岩地にのみ生き残った、希少な「大陸系遺存種」であることを学びました。

数奇な歴史を持つタイシャクイタヤとは

日本列島は、かつてアジア大陸の一部でしたが、次第に大陸から切り離され、今のような形になりました。その頃までにはタイシャクイタヤが既に存在し、氷河期が終わって温暖化が進むと自生地も分断され、今のよう孤立した分布になったようです。

他種との競争にさらされた本種が、日本列島でこの地域に生き残れた理由は、帝釈峡の乾燥しやすくアルカリ性の土質となる石灰岩地帯が、競争から逃れる「避難所」のような役割となったからだそうです。

このような歴史を経て、タイシャクイタヤはこの地球上で、一万年以上前に海を隔てて生き別れた同種と共に、日本列島とアジア大陸のそれぞれの地で、今なお生き続けています。

本種は、休暇村帝釈峡にある東城町三坂の庄原市指定天然記念物「三坂氏清のタイシャクイタヤ」をはじめ、神龍湖の遊歩道一帯でも観察でき、最近になって上帝釈峡エリアでも確認されました。

(参考：「広報しょうばら」 2026年4月号参考)